

その群衆のただ中へ

上海市、海佳（ハイチャー）飯店。ドミトリのベッドにて。午後八時四五分。

さつき、同室になった日本人の男女と一緒に、三人で散歩をして、戻ったところだ。

この海佳飯店は上海市の中心部からは少し東にはずれた所に位置している。その場所も分からないままに、船中で「一番安い宿」と指定して、予約したのだった。一泊、一六〇〇円。日本の感覚で言えば安いし、何よりも見知らぬ土地で一泊目の宿が確保されているという安心感には代えがたい。

カウンターの男が手渡した領収書には「上海中国国際旅行社」と書いてある。実はこの中国国際旅行社（CHINA INTERNATIONAL TRAVEL SERVICE 略して CITS）こそは中国における外国人旅行者を掌握し、望ましい旅行パターンに押し込み、外貨収入源としての観光を売りつける中国政府の出先機関なのだ。そのいいかげんさに関しては様々な旅行書が実態をリポートしているが、海佳飯店到着早々に早くも実地体験することになる。

僕と同じように船中でホテルを予約した日本人たち七、八人は、港に待機していたCITS職員の運転するバンで送られ、それぞれのホテルへと降ろされた。海佳飯店は港から一番遠くて、三〇分ほどかかった。ホテルに着いて、チェックインをするときに分かったことだけれども、実はこのホテルのドミトリの料金は一八元、約三六〇円なのだ。従って、一六〇〇円のうち一二〇〇円強は紹介料と送迎費ということになる。これが合理的な料金かどうかということはここでは問わない。

ドミトリのベッドでひと息をついていると、日本人の男が入ってきた。いろいろ話をしていると、彼は船中での海佳飯店のドミトリを何と一週間分も予約したのだと言う。そして七泊分として一六〇〇×七＝一一二〇〇円を支払ったという。実際の料金は三六〇円×七＝二五二〇円だ。一週間分も予約するというのもどうかと思うけれども、受け取る方も受け取る方だ。一泊一六〇〇円のうち実際のホテル料金との差額、一二〇〇円が紹介料と送迎費というのなら、二泊目以降の分には当然含まれないはずだ。一体どういう料金体系になっているのだろう。（おそらく料金体系などはないのだ。ただ恣意的な慣例と上からの通達があるだけなのだ。そのことは中国旅行中さまざまな場面で僕自身が痛感することになる。）

彼はホテルのカウンターでかけあい、らちがあかないので明日CITS

Sに行つて交渉してくる、と言つていたが、差額分を回収するのは至難の技だろう。最悪の旅行のスタートになつたわけだ。

一方、僕の方はどうかと言うと、後から予紛なしでチェックインした日本人から、もちろん一八元(三六〇円)しか払っていない、と聞くと、ちよつと心がざわついたりするのだけれども、まあまあスタートだつたと言えるだろう。

日も暮れ落ちた下町を日本人三人で散歩し、煙草工場のやたらと煙草臭い一角を通り、街角でひとり、揚げパンのようなものを売っていた少女から、その揚げパンをFECで買い、少女は偽札じゃないかしらと外灯でFECの札を透かしてみたり、近くの大人と相談したりして、ちよつとした騒動になり、コーヒーが飲みたくなって喫茶店に入つてみると同伴喫茶のような薄暗い店内で、コーヒー三人分、四〇元(FEC)も取られ、海佳飯店のレストフンで食事をして、三人分で七五元(FEC)もかかったけれども、まあまあスタートだつたと言える。(ちなみに、後でわかつたことだけれど、街中の食堂で食事をして一〇元(人民幣)前後、屋台でたつぷり食べても数元。また中国ではコーヒーはあまり普及してなくて、喫茶店というのはちよつと特別の存在なのだ。従つて、とても高い。)

コンクリート壁の室内にシャワーの蛇口がいくつか並んでいるだけのシャワー室でお湯を浴びて(一元)、まだ少し浮き立った気分です三人三様ドミトリのベッドで旅行書などを読んでいた。

悪夢は静かに足元まで忍び寄っていたのに。

(注) FEC(ワイフェイ)と人民幣(レンミンピー)

中国には二種類の通貨が存在する。中国圏内において、一般の民衆が使用する人民幣とFEC(Foreign Exchange Currency)だ。FECは中国語で外幣(ワイフェイ)という。

人民幣が中国の圏内経済に対応するとすれば、FECは中国経済の国際的な位置をあらわす。人民幣が内向けの顔だとすると、FECは外向けの顔だ。FECはそのときどきの交換レートに従つて外貨との交換ができるが、人民幣は交換できない。

外国人旅行者は入国するとまず外貨をFECに交換することになる。ホテルの支払い、観光地の入場料、交通機関の運賃等の支払いにおいて外国人旅行者はFECを求められる。た

てまえとして、外国人旅行者はF E Cしか、持っていないことになっている。

しかしながら、ホテルの出口などにたむろする闇両替屋の姿をあなたは目にするだろう。彼らは一〇〇元のF E Cに対して一五〇元から一八〇元の人民幣を条件にして交換を申し出る。輸入商品の購入や出国準備などに圧倒的にF E Cが有利であり、必要であるからだ。たてまえとしてはF E Cと人民幣は一對一なのだけれども、闇の交換レートは右に述べたようになっている。

さて、個人の外国人旅行者にとって、人民幣を必要とする事情は二つある。ひとつは、普通の商店ではF E Cでも人民幣でも値段は同じなのだから、人民幣を使った方が得だということ、あるいは田舎街の商店や食堂などではそもそもF E Cでは通用しないということがあるからだ。もうひとつは、交通機関の料金、観光地の入場料は外国人と中国人とは違うということ、外国人は約二倍の料金をしかもF E Cで要求されるということ、つまり外国人は中国人の三倍から四倍の料金を取られるということだ。したがって、ここは中国人に成りすまして、窓口では人民幣を差し出し、あわよくば中国人料金でチケットを手に入れるに限るというわけだ。

損得を勘定してみれば、こういうことになるのだけれども、それを抜きにしても、もしも中国人の生活の目の高さで旅をしようと思つたら、どうしても人民幣、つまり、中国人が普通に使っている貨幣が必要なのだ。F E Cは外国人の高くつく特権なのだから、まずは闇を一度くぐって、人民幣の世界に入らねばならない。以降、本文では特にF E Cと断わらないかぎり人民幣をあらわすことにする。

(なおこの二重通貨制度は一九九四年より廃止された。)

※

上海站(駅)前広場の群集を目の当たりにして、僕は立ちすくんだのだ。つた。

目前を行き交う無数の人々、出迎える人々、到着した人々、こぎれいな人、薄汚れた人。快餐(カイツァン)と呼ばれる中国式ファーストフードの弁当屋の前に群がり、また階段に腰を下ろして弁当をむさぼる人々、花壇の周りに陣取って動こうともしない人々。宿の名前と値段を書いたプ

レートを片手に行ったり来たりする客引きたち、家財道具一揃いを荷造りしたような大きな荷袋の前に座り込んで、ひまわりの種を食べる家族たち。一角札(＝〇・一元、約二円)を握りながらぶつぶつと物乞う老婆や少年。大声を張り上げて行き先を連呼するミニバスの呼び込み、満員の乗客を乗せて、次々に出発する二両連結のバス…。

まさしく、群衆としか名付けようのない中国人たちが、上海駅前広場に群がり、うごめいていた。ある者は日本のサラリーマンのようにせかせかと動き、ある者はこぎれいなファッションに身を包んで優雅に歩き、ある者は快餐をついばみながら、どろんとした目玉だけを動かし、ある者は何時間も動かないまま、じつと人々の行き交う姿をぼんやりと、我慢強く眺めつづけ、ある者はそれぞれの目的の方へ、ある者は目的も希望もないように、座り込み、立ちつづけ、そしてひしめきあっていた。

僕はただひとり、初めて目前にする群衆としての中国人の姿に立ちすくみ、中国を旅行するということの意味を理解していたのだった。そこに一步を踏み出すのだ。その群衆のただ中に、一個の異邦人として、入っていくのだと。やがてそのとき僕をたじろがせた群衆がひとりひとりの人間として見えてくるまで。

見知らぬ所に、ただひとり置かれたとき、普通、人はどのように行動するだろうか。おそらくまず自分の場所を確保するだろう。つまり、まずホテルを捜す。その次に、もしも空腹だったら、食い物を確保するだろう。これらのことはその見知らぬ場所において生きるために最低限必要なことだ。そして、この最低限生活の確保、その次には？ おそらく駅へ行くのだ。「移動」を確保すること。旅をするということにおいて、もしも下部構造があるとしたら、それはこの最低限生活と「移動」ということに要約されるだろう。そしてこの下部構造の上に立って、人との出会いや、驚くべき風景、あるいは観光地での感動など、つまり旅の情緒的な面が構成される。

中国旅行の困難と面白さというのは、この下部構造を自らが構成することの困難と面白さにある。そのことに比べると、旅の情緒的な側面など取るに足りないもののように思えてくる。中国四〇〇〇年の歴史でさえも、むしろこの困難と面白さを味わうための口実にしかな過ぎないもののように思えてくるのだ。

ともかく、僕は「移動」の確保に取りかかろうとして、海佳飯店から約一時間も歩き(バスに乗れば速いし、楽なだけでも、バスの乗り方が分からないし、ゆつくりと歩いて街の様子を楽しみたかったのだ)地図を読みまちがえて、北站という所でウロウロと小一時間も捜し、人に尋ねて、

ようやく上海站にたどり着いたというわけだ。あわよくば、杭州行きの手ケットを手にいれたかったけれども、ともかくは駅の感じだけでもつかんでおこうと思ったのだった。

広場の群衆をかきわけるようにして、まずはチケット売場を捜した。広場に面して、一〇〇メートルほどの長さの駅舎がそびえていたけれども、そこには入口（候車室入り口）と出口、軟席入口、それに軽食などの売店しかないのだった。

候車室入口から駅の中へ入ってみた。階段を登っていくと、通路に沿って各方面行きの候車室があり、売店が並び、人がひっきりなしに行き交っている。その一角に人の流れがよんでいる場所があった。覗いてみると、発泡スチロールの容器にごはんを入れておかずをどかつと乗せただけの快餐を売っているのだった。ひとつ三元。老いも若きも、男も女も、それぞれの格好で、ある者は立ち食いをし、ある者は通路の壁にもたれて、一心に食べている。急に腹が減っていたのを思い出し、僕もその快餐を買い、ちよつと汚れた通路の壁にもたれて、食べた。誰も何も気にしない。その格好も、隣に誰がいるかも気にしないで、ただ無心に食べていた。そのことが少し心地良かった。

食べ終わって、腹も満腹。さて、と立ち上がり、ふと売店を見ると、時刻表が目に入った。「全国鐵路旅客列車時刻表」約四元。代金を払うときにひと悶着。人民幣をあまり持っていなかったので、FECで払おうとしたのだけれども、売店のおばさんは「そんなものはお金じゃない」と、頑として受け取ろうとしないのだった。たまたま、そのときは代金分の人民幣はあったので良かったのだけれども、中国人の普通の生活ではFECは通用しないということを思い知らされたのだった。

さてチケット売場だけれども、どうしても見つけないことができず、仕方がないので、軟席候車室の方へ行ってみた。軟席というのは政治家や企業の幹部、エリートたち、あるいは香港や台湾人、外国人旅行者のための座席で、とても高いので利用するつもりはなかったのだが、軟席候車室の中には、外国人用のチケット売場があるのだ。外国人用のチケット売場でチケットを買うということは、外国人料金をFECで支払うということなので、できれば避けたかったのだけれども、他の方法が分からなければ仕方がない。チケット売場を確認し、別世界のように静かな軟席候車室の椅子に腰を下ろして、さっき買った「時刻表」をぱらぱらとめくった。B6判、300ページ程の時刻表に中国全土の列車の運行が尽くされてしまふというのはちよつとした驚きだった。

(注) 中国の火車(列車)事情

中国の火車は全て指定席で、軟座と硬座、あるいは長距離であればそれに加えて、寝台の軟臥と硬臥がある。

軟座や軟臥というのはすでに書いたように特権層の席であり、とても高く、また外国人は中国人の二倍の料金を取られるのだから、乗り物としてはハナから問題にならない。問題は硬座(あるいは長距離の場合は硬臥)のチケットをどのようにして手に入れるか、なのだ。

駅にチケット売場がある場合には、当然、中国人たちの長い行列の最後尾につき、中国人の顔をして、中国人の方法でチケットを手に入れることになるが、上海や北京などの大都会ではチケット売場が街中にあることがある。また、体力と気力と時間とがない場合にはチケット売場の外国人用窓口や場合によつてはホテルのカウンターで購入することになる。外国人用窓口でチケットを購入する場合は、中国人の二倍、ホテルのカウンターで頼むときはそれに手数料を取られることになる。また、路線によつては硬臥のチケットはほぼ手に入らないものと覚悟しなければならない。

何にしても、火車(列車)のチケットを手に入れるということとは中国旅行の最重要事項のひとつである。

なお、以上は始発駅から乗車する場合のことで、途中駅から硬座に乗車する場合は、座席指定はないので、車両に乗り込み、席を確保するために、中国人たちとの死闘を覚悟しなければならない。